

Title	「辺境地」をめぐるソヴェト史学の最近の討論
Author(s)	保坂, 哲郎
Citation	経済論叢 (1972), 110(3-4): 160-179
Issue Date	1972-09
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/133485">http://dx.doi.org/10.14989/133485</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第110卷 第3・4号

---

大正期における地方自治変貌の一視点……………	島 恭彦	1
河上肇における経済と人生……………	杉原四郎	17
河上肇と社会科学の方法……………	山之内靖	34
「辺境地」をめぐるソヴェト史学の最近の討論…	保坂哲郎	60
予算制度改革論の一原型としての GMの基準価格制の形成と管理機構……………	小野秀生	80
河上肇先生遺品展および記念講演会記事……………		103

---

昭和47年9・10月

京都大学経済学会

## 「辺境地」をめぐるソヴェト史学の 最近の討論

保 坂 哲 郎

### は じ め に

前稿でわれわれはレーニンの「辺境地」論を概観してきた。本稿においては、このような「辺境地」をめぐるソヴェト史学の討論を検討する。第一に A. B. ファデエフ論文を中心とする討論について、第二に「帝国主義期ロシアにおける農業機構の特殊性」における諸見解について検討する。

### I A. B. ファデエフ論文をめぐる諸見解について

1956年 A. B. ファデエフは、論文「改革後ロシアにおける資本主義の外延的發展」を報告し、この報告をめぐる多数の農政史家が討論を行なった<sup>1)</sup>。

ファデエフ論文は、「外延的發展」について、帝国主義との関係、ツァーリズムの「軍事的-封建的帝国主義」規定との関係で問題提起をしたものであり、後に検討する「帝国主義期ロシアにおける農業機構の特殊性」における議論の背景の一つをなしていると考えられるものである。

ファデエフはいう、資本主義の外延的發展は、社会的分業を拡大し資本主義的發展を促進するが、他方、前資本主義的諸関係との矛盾を深める。このような發展の対象として、ロシア中央部の周辺を、すべて植民地として一括してし

1) A. B. Фадеев «Развитие капитализма вширь в пореформенной России». («Доклады и Сообщения Института Истории» Выпуск 10, 1956). И. Бестужев-Рюминによる要約によると、討論参加者は、B. Д. Мочалов, K. B. Шифков, B. Ф. Болзунов, M. Я. Гельфанд, C. M. Дубовский, M. B. Нечукина, B. K. Яценский, Г. A. Артюхов, A. B. Фадеевである。

まうことは正しいだろうか。これが問題提起の第一点である。これに対してファデエフは次のように答える。

「以前のツァーリ・ロシアの南、東の辺境地には二つの型の地域が当時あった<sup>2)</sup>。第一の型は、レーニンが「60年代には……ほとんどまだ人の住んでいない地域であって、そこには農業的な中部ロシアから大々的な移住者が流れこんでいた」とのべたような、黒海沿岸、ブレドカフカーズ、シベリア、極東のような地域であり、第二の型は、ザカフカーズ、中央アジアのような、十分な人口密度をもち、そこに居住する人民により、ずっと以前から開発されているが、しかし、「非資本主義的な古い国々」のカテゴリーに属し、いまだ世界商品流通に引入られていない、地域である。「第一は——より早く、第二は——より緩慢に、資本主義によって経済的に征服され、全ロシア的資本主義市場体制に引込まれていく」<sup>3)</sup>。

第一の地域は、南部ステップ（ノボロシア）地方、ブレドカフカーズの地方のように、農奴制残存物が欠如しているか、あるいは弱く、商業的＝資本主義的農業が成長し、中央部工業と分業関係が成立する、「経済学的意味における中央部ロシアの植民地」<sup>4)</sup>である。

レーニンは「植民地のこの概念は他の辺境地、たとえばカフカーズには、さらにいっそうよくあてはまる」<sup>5)</sup>と強調した。しかし、カフカーズは社会・経済関係においては、まったくちがった第二の型の地域である。

この第二の型の地域では、資本主義の外延的發展は、強力な封建的、家父長的遺制と民族抑圧に規定された本質的特殊性をもつ。ロシアブルジョアジーはツァーリの征服政策を全面的に支持し、カフカーズをロシア工業の原料基地と販売市場に変える意図をもち、ツァーリの諸機関を利用した。「まさにこの協力は、レーニンが、ツァーリ・ロシアの政治的上部構造を独特な《軍事的・封

2) Там же, стр. 7.

3) Там же, стр. 7.

4) Там же, стр. 10.

5) 邦訳レーニン全集、第3巻、627ページ。

建の帝国主義》と特徴づけた基礎を与えた」<sup>6)</sup>。経済的發展は緩慢で一面的性格をもち、地方ブルジョアジーは従属的狀態にあった。ロシア・ブルジョアジーは工業生産には投資をせず、鉄道建設やそれ以上に信用活動によって利潤を得ようとしていた。

地方クスターリ産業は中央部ロシアの工業により崩壊し、労働者の状態は債務奴隷制的であった。地主的巨大土地所有、強力な封建遺制が存在し、全体としてはおくれた農業地域であった。

このような強固な封建遺制や植民地状態によって、資本主義の市場形成・確立過程は阻止され、制限されていた。このように、ロシア中央部周辺の「植民地」といっても、資本主義的諸関係の普及という面では共通していても、その普及の形態においてまったくちがった二つの型が見られ、カフカーズなどに対する普及の形態は《軍事的・封建的帝国主義》の基礎である、というのが答えである。

ファデーフの問題提起の第二点は、資本主義の外延的發展と内包的發展との関係について展開される。資本主義の外延的發展と同時に、ロシアにおいて、内包的發展も続いたことは重要である。技術の改善、生産組織形態の進化、工業および銀行の集中、独占の支配などが生じた。

資本主義の内包的發展は、中央部のみでなく、辺境地においても生じた。

資本主義の外延的發展と内包的發展との関係について、レーニンは「……これらの契機のあいだに『本質的な』差異はない。それらのあいだに現実に存在する相違は、技術の進歩の種々の段階の差に帰結する」と、のべている。この点を、ファデーフは次のように考える。「第一段階（外延的發展）にとっては、レーニンが、原始的な商品生産形態における資本主義、と定義したところの生産活動諸形態が特徴的である。第二の段階（内包的發展）にとっては、《純帝国主義的な資本主義》に漸次、發展する、より高いより複雑な生産形態が典型的

6) А. В. Фадеев «Развитие капитализма вширь в пореформенной России», («Доклады и Сообщения Института Истории» выпуск 10, 1956) стр. 11.

である」<sup>7)</sup>と。

そして、例えば、1860—70年代には、ステップ南部地域では、新しい地域への資本主義的関係の普及が特徴的であり、80—90年代には、すでに、この地域で、しかし、より高い水準で、資本主義的農業、工業の一層の成長がみられた、として、資本主義発展のこの二つの過程を概念的にも、また、歴史的にもはっきりと区別する必要を述べている。

以上がファデーフ論文の要旨である。次に、ファデーフ論文を基礎とし、我々の問題に関連した意見を述べている論者をみていくことにしよう。

B. A. モチャロフは「資本主義の外延的發展の問題には、表面的な、全体的見通しによるのではなく、どのような地域か、どのような経営か、どのような社会的一經濟的發展水準なのかを考慮して接近しなければならない。」<sup>8)</sup>といい、ファデーフの接近方法を肯定したのち、「……もし、資本主義の外延的發展が、社会的分業過程を進化させ、家父長的現物経済が、まず単純商品生産、つぎに資本主義的生産にまきこまれるもの、として考察されるなら……報告は非常によいものとなろう。社会的分業の進化過程としての資本主義の外延的發展の進歩性についての報告の結論は、より根拠をあたえられ、報告でのべられた具体的歴史的資料とより密接な関連をもつだろう」<sup>9)</sup>と批判する。

次に、B. Ф. ボルズーノフについて。彼は次の三点についてファデーフを批判する<sup>9)</sup>。

(1) 独占資本主義期とそれ以前の時期における外延的發展の質的ちがいが区別されていない。

(2) 「植民地」概念について、ファデーフは「辺境地の工業、商業における金融資本の役割」を示していない。

(3) 民族的辺境地に対するツァーリ政府の政策の規定が一面的である。例えばシベリアにおいてはこの政策は時により非常に矛盾したものであり、資本主

7) Там же, стр. 15.

8) «Обсуждение доклада А. В. Фадеева» (там же), стр. 18.

9) Там же, стр. 19.

義の外延的發展をつねに促進させたとは決していえない。

C. M. ドブロフスキーは、資本主義の外延的發展の概念を地理的、時間的に、精確にする必要があること、独占資本主義以前の時期と以後の時期における資本主義の外延的發展の質的なちがいを考慮する必要がある、という意見を支持する。また、「植民地」概念については、「植民地のもっとも本質的で特徴的な標識は、民族的抑圧の存在である。……実際、シベリアも全体としては……植民地ではなく、民族地域のみが……植民地の状態にある。」<sup>10)</sup>という。

さらに、シベリア、北カフカースステップ地域において、農業の資本主義的發展が企業家的経営の形で進んだという意見に反対して、「地主の支配、ツァーリズムの存在、警察署長、官吏の存在のもとでは、農業の資本主義的發展は、アメリカ的型にそって、発展しなかった。」<sup>10)</sup>と述べ、ロシア資本主義が全体としてプロシャ型の道で進んだことを主張する。

B. K. ヤツンスキーは、ファデーエフの主張を全体として正しい、と評価している。

以上で、紹介をおえて、ファデーエフ論文とそれをめぐる討論を検討しよう。

ファデーエフの提起した第一点について、レーニンはこの点についての該当箇所では、「農民改革後の時代に人が住むようになったヨーロッパ・ロシアの南部および東部の辺境がほかならぬこの特徴(『植民地』についてのマルクスの2つの基本的標識—引用者)によって特徴づけられており、経済学上の意味で中部ヨーロッパ・ロシアの植民地となっている……。この概念は、その他の辺境、たとえばカフカースには、さらにいっそうあてはまる(傍点—引用者)。ロシアによるその経済的『征服』は政治的征服よりもずっとあとで行われたが、この経済的征服は、今日でも完全にはおわっていない。農民改革後の時代には、一方では、カフカースの強力的な植民地化、入植者による土地の広範な開墾が(特に北カフカースで)行われ、そしてこれらの入植者は、販売するために小麦、煙草、その他を生産し、ロシアから農村の賃金労働者を大量に吸収した。他方では、

10) Там же, стр. 22.

……『クスターリ』営業の駆逐が進行し、それらの営業は……没落した。……こうして、ロシアの資本主義はカフカーズを世界的商品流通に引き入れ、その地方的特殊性を……なくし、自分の工場のための市場をつくりだした。……カフカーズの植民地化の結果およびその農業人口の増大の強化の過程とならんで、……農業から工業への人口の転出の過程もまた進行した。……同じことは中央アジアでもシベリア等々でもおこったし、又おこっている」<sup>11)</sup> といっている。

この場合、「ロシアにおける資本主義の発展」は、ロシア資本主義の発展＝国内市場の形成過程という視角から（「ロシアの国民経済の種々の側面は、どのように、またどういう方向に、発展しているか？ これら種々の側面のあいだの連関と相互依存性とはどういう点にあるか？」）、資料が考察されているのであり、資本主義の外延的発展、「植民地」についての分析に関しても例外ではない。

ファデエフの分析、特にカフカーズについての分析は、ツァーリ政策とブルジョアジーの利益の合致の形態、カフカーズの植民地的性格（経済発展の一面性、地方ブルジョアジーの従属的性格）の解明、ロシアブルジョアジーの利潤追求活動形態などが分析の対象となっており、レーニンの「発展」の抽象次元よりはより具体的な発展法則（この場合「外延的発展」）の貫徹の仕方が問題にされているのである。この点では、今までの単純化された「植民地」概念に対して前進であるということがいえる。

しかし、資本主義的発展と封建制との関係、その矛盾、対抗、癒着関係を問題にする場合、特に資本主義の外延的発展と封建遺制とを問題にする場合、レーニンの「発展」段階の理論のみでなく、「二つの道」段階の理論を基礎とすることが必要であることを、我々は前稿でみた。アメリカ型の資本主義か、それともプロシヤ型の資本主義が発展していくのか、という視角とそれに基づく分析が必要であるのだが、この点をファデエフ論文は欠いている。したがって、B. Φ. ボルズーノフの第(3)批判点、そして、地主、ツァーリズム、警察署長、

11) 邦訳レーニン全集、第3巻、628ページ。



官吏の存在のもとでは(シベリヤにおいてであろうと)、アメリカ型の資本主義発展はありえない、という C. M. ドブロフスキーの批判はともに、この問題点をはっきりとは指摘してはいないが、ここにファデエフ論文の問題点があることを正しく批判しているのである。

次に第二点にすすもう。ファデエフの引用するレーニンのこの説明は、クラシンの考え方を批判したものである。クラシンは「資本の蓄積における二つの本質的に異なる契機」を区別する必要があることを指摘し、「(1) 資本主義的生産の横への発展、それが労働の既成の分野をつかんで、現物経済を駆逐しながら後者の犠牲で拡大するとき、(2) 資本主義的生産の……縦への発展、その拡大が現物経済とは係わりなしに、すなわち、資本主義的生産様式の全般的、かつ排他的な支配のもとでおこなわれるとき」と区別し、資本主義の発展を例解している。

レーニンはこの考えを「一般に通用しているナロードニキ的な物の考え方とまったく一致」しており、「わが資本主義制度の諸現象をなになに一つ説明」しない、といって批判し、資本主義の歴史的発展においては、二つの契機が、すなわち「(1) 直接的生産者の現物経済の商品経済への転化、(2) 商品経済の資本主義経済への転化、が重要である」という。

さらに、この過程から、次の結論を導く。

第一は、『市場』の概念は、社会的分業……の概念と、まったく不可分のものである、ということ、第二は、『人民大衆の貧困化』……は、資本主義の発展をさまたげないばかりでなく、……資本主義の条件であり、また資本主義を強化するものである」こと、第三は、生産手段の生産の意義に関するもので、「生産の集積は労働生産性を高め、手労働を機械労働にかえ、ある数の労働者をほうり出した。他方、資本家によって不変資本に転化される、これらの機械やその他の生産手段もまた発展したが、この不変資本は、いまや可変資本よりもより急速に増大しはじめる。……この法則のすべての意義とすべての重要性は、手労働の機械労働による交替——一般に機械制工業のもとでの技術の

進歩——が、石炭や鉄、これら真の『生産手段のための生産手段』を獲得するための生産の強力な発展を要求する、ということにある。<sup>12)</sup>

この第三点に関して、レーニンは、「だから、資本主義の発展を横への発展と縦への発展とに分けることの誤りであることが、わかる。全発展は一樣に分業によっておこなわれるのである」<sup>13)</sup>という。この後に、ファデエフの引用した説明がつづき、さらに、「資本主義的技術のより低い発展諸段階——単純協業とマニファクチュア——は、まだ生産手段のための生産手段の生産を知らない。それは、高度の段階——機械制大工業——のもとでのみ発生し、巨大な発展をとげる」と、続けるのである。

ここからわかるように、レーニンの、資本主義の歴史的性質としての「内包的発展」、「外延的発展」の概念と、クラシンの「資本の蓄積における二つの本質的に異なる契機」としての、資本主義の「横への発展」、「縦への発展」の概念は、まったく異質のものであり、ファデエフのこの二つの概念の安易な同一視は誤ったものといわねばならない。

さらに、ファデエフは、資本主義の横への発展＝第一段階、縦への発展＝第二段階としているが、これも誤っている。技術の進歩の種々の段階の差異として、レーニンは、単純協業とマニファクチュアの「低い発展段階」と、機械制大工業の「高度の段階」を区別しているものであり、この二つの段階と、資本主義の「横への発展」、「縦への発展」とは、直接的に等置できる関係にはない。

次に、ファデエフは、ブハーリンの「純粹帝国主義」を批判したレーニンの「ロシア共産党(ボ)第8回大会」における演説から、「原始的商品生産形態」と「純粹帝国主義」という言葉を引用して、資本主義の外延的発展には、資本主義の「原始的商品生産形態」の活動形態がより特徴的であり、資本主義の内包的発展には「純粹帝国主義」の側面で常に進化するより高い複雑な経営形態が典型的である、とする。資本主義の内包的発展が資本の集中・集積をもたら

12) 邦訳レーニン全集、第1巻、101ページ。

13) 同上、102ページ。

し、帝国主義の経済的基礎を形成していくことは、明白であるが、この箇所ではレーニンが述べていることは、ブハーリンの「資本主義という基礎をもたない純粋の帝国主義」を描こうとする試みを批判して、このような帝国主義はどこにも存在しておらず、今後も決して存在しないこと、「マルクスはマニファクチュアのことを、それは大量な小規模生産のうえに立つ上部構造であると言ったが、帝国主義と金融資本主義は、古い資本主義のうえに立つ上部構造である。その上部構造を破壊するなら、古い資本主義が現れるであろう」<sup>14)</sup> といひ、この「古い資本主義」の意味で「原始的な商品生産形態」が、上部構造としての「帝国主義」として「純粋帝国主義」がいわれているのである。従って、「原始的な商品生産形態」と資本主義の外延的發展、「純粋帝国主義」と資本主義の内包的發展という対応関係を想定することは、少くとも直接的に想定することは誤っている。

以上で、ファデエフ論文とそれをめぐる討議の検討をおわる。ファデエフ論文の重要な問題点として、レーニンの「二つの道」段階における、資本主義の外延的發展の問題が十分考慮されていないことを、われわれは指摘した。次にその点が論議の中心点の一つとなっている、討論集「帝国主義期ロシアにおける農業機構の特殊性」をとりあげよう。

## II 「帝国主義期ロシアにおける農業機構の特殊性」<sup>15)</sup>

### における辺境地問題

14) 邦訳レーニン全集、第29巻、155ページ。

15) 報告と討論は次のような人によって行われた。

C. M. ドブロフスキー：帝国主義期ロシア農業における資本主義發展水準と、農村の階級闘争（二つの社会的闘争）の性格の問題について。

M. A. ルバチ：1917年までのウクライナ農村における農業諸関係の社会的構造と農民の階級分解。

A. M. アンフィモフ：20世紀初頭ロシアにおける農業諸関係の性格に関する B. И. レーニン。

E. A. ルツキー：大10月社会主義革命準備期におけるボリシェビキの農業綱領の社会・経済的諸基礎。

П. И. クリモフ：1905-1907年革命期における労働者階級と農民との同盟の問題について。

Л. Б. ベリャフスカヤ：極東に対するストルイビン移民政策の社会・経済的諸結果。

A. A. フラムコフ：19世紀末から20世紀初頭のシベリア農業における資本主義發展の若干の問題について。

「二つの道」の理論とロシアの辺境地の問題にふれている論者の考えをみていこう。

まず、ロシア資本主義はプロシヤ型の道でのみ発展した、という意見をもつ M. C. ドブロフスキーの見解をみよう。

「ナロードニキに反対して、B. И. レーニン<sup>1)</sup>は、ロシアにおいては封建的・農奴制諸関係の巨大な残滓にもかかわらず、農業における資本主義の発展は不断におこなわれている、とのべた。彼はこの発展の二つの道の可能性についての考えを検討した：プロシヤ的とアメリカ的。プロシヤ型の道にそって、だいたい19世紀中頃からはじまり1917年の革命まで、事実上、地主・農奴主やそれを支持する商・工業資本家や銀行資本家が資本主義を発展させた。……わが国の資本主義発展のプロシヤ型の道は定着したけれども、実際上は勝利しなかった。アメリカ型の道のためにはただ闘争のみがおこなわれ、そのための経済、政治の活動のすべての必要な諸前提が形成された。

ロシア農業における資本主義の発展が、あたかも、プロシヤ型の道によってのみでなく(これは明白である)、同時に、アメリカ型の道によってもおこなわれたかのような意見は誤っている。農奴制の遺制がより少なかった地域においては、疑いもなく、より自由に資本主義が発展した。しかし、これらの地域における資本主義の発展がアメリカ型の道によるものであるという主張は、経済的、政治的発展の事実と明らかに対立する、なぜなら、農奴制度の残滓は、さまざまな程度で、いたるところに形成されたからである。

B. Ф. Болзенов: 20世紀初頭(1900-1914年)のシベリア、極東の農業発展に対するシベリア横断鉄道の影響。

П. Г. Галун: 革命前(19世紀末—20世紀初頭)セミレチイの農業諸関係の歴史から。

Ю. И. Кирьянов: 第一次世界大戦時(1914—1916年)のメナップ・ウクライナにおける農民。

И. Д. Кознецов: 十月前のチュベシヤにおける農業問題。

Л. А. Селиванов-Фаска: 19世紀末—20世紀初頭のオレンブルグのカザック人の経済的状態と社会的分化。

討論参加者は、B. K. Язновский, A. Ф. Иелсаримский, A. B. Фадеев, M. A. Исмаилов, H. П. Егоров, A. B. Шапкарин, H. M. Дубровитов, E. И. Ремеш, Ф. E. Ронин, M. C. Беллов, Л. П. Минский, B. Д. Шумитов, E. B. Шибенин, B. П. Данилов, K. И. Шапнян, であり, A. Л. Шдروفが結語をのべている。

それ(アメリカ型の道—引用者)は民主主義革命の後でのみ可能である。すべての農奴遺制の革命的廃棄の後でのみ可能である、と考えたレーニンの……定義そのものと上述の主張は矛盾している。

ロシアにおいてツァーリ専制の形で地主・農奴主が支配していた間は、国の経済、政治活動において封建・農奴制的諸関係の巨大な残滓があり、上述の地域の諸関係においてさえ、アメリカ型の道による資本主義の発展について語ることは、もちろん、不可能である。10月革命勝利後においても、農業における資本主義発展のアメリカ型の道は存在しなかった。民主主義革命は、直接に、プロレタリア的社会主义革命へ成長転化した。その勝利の後には、資本主義の道にそってではなく……資本主義的要素との激烈な闘争における、社会主義の発展の道にそって農業は発展した。

これらの事情の結果、革命前ロシアにおける資本主義の発展にとって、事実を証明するのはまさにプロシヤ型の道である、もっとも、それは確立はされなかったが。この道にとって特徴的なのは、農奴制残滓の存続、ツァーリ専制の形をとった地主・農奴主の独裁である。これは、大多数の農民大衆にとっては、もっとも困難で苦しい資本主義発展の道である」<sup>16)</sup>。

ここでのドブロフスキーの考えは、アメリカ型の発展をきわめて厳密で「純粹」な形態として規定している。しかし、プロシヤ型の道の標識が上部構造の内容も含めて規定されており、かならずしも明確な概念となっていない。この点では、ドブロフスキーを批判するボルズーノフ、セリパノーフスカヤも共通した内容をもつ。

B. Ф. Болзёновは、「極東の農業の資本主義発展の支配的傾向は、アメリカ型の道の進化であり、その構成要素は次のものである：相対的に自由な土地利用、農奴制遺制の強力な圧迫がないこと、資本の自由な蓄積、充実した技術設備、その他、である。それとともに、農業進化の他の型にとって特徴的な

16) «Особенности Аграрного строя России в период империализма» А. Н., 1962, стр. 6-8.

現象に注意する必要がある。《土地狹隘化》の表われ、政府の土地整理は移民政策による自由な土地利用の侵害、税や労役義務の強化、地主的土地所有定着化の試み、地方農民の経済的政治的自主性の制限（ゼムストヴォの欠如、裁判制度改革の遅れ、その他）である。ヨーロッパ・ロシアの農業におけるように、極東でも、これら二つの傾向の闘争がおこなわれたが、その結末は国の政治勢力の関係いかんによった」<sup>17)</sup>。

Л. А. セリバノフスカヤは、オレンブルグ県における資本主義発展の問題をつぎのようにのべる。

「二つの道の問題を国のすべての地域にとって一つの基準でもって皮相的に取りあつかうことはできない。国全体としても、また、一つの県の範囲内でも、社会—経済発展水準のちがった地域を区別しなければならない」。

オレンブルグ県についても、カザック地域と残りの地域を区別して、「カザック地域では、ツァーリ政府機関が封建的諸関係を頑強に維持した。経営や生活における多くの中世的特徴の存続により、資本主義発展のもっとも緩慢で、進歩性のもっとも少ない形態がもたらされた。この地域について、資本主義発展のアメリカ型の道を語ることは不可能である」<sup>18)</sup>という。また、オレンブルグ県の残りの地域については、貴族土地所有、農奴的農民、の比率、辺境地の植民地化の速度、商業的農業の発展、新しい技術を装備し賃労働を使用する富農農業の成立、農民の階級分化、を検討して次のようにいう。

「このようにして、農奴制残存物の弱さ、賃労働力の大きい市場の存在、移住者の巨大な流入、以前開墾されて利用されていない大量の土地の存在により、オレンブルグ県公民地域の農業の資本主義的発展のはやい速度がもたらされ…アメリカ型の特徴がもたらされた」<sup>19)</sup>。

「アメリカ型の進化は南東ロシアのみでなく、一連の他の地域でもみられる」<sup>20)</sup>。

17) Там же, стр. 170.

18) Там же, стр. 265.

19) Там же, стр. 266-7.

20) Там же, стр. 267.

ロシアにおいてアメリカ型の農業も部分的には発展したという点で、ボルズーノフ、セリバノーフスカヤと結論的には共通しているが、「二つの道」の概念規定の点においてちがっているのはシャブカリンである。

A. B. シャブカリンは、「二つの道」の問題について C. M. ドブロフスキーが「革命前ロシアの農業はプロシヤ的道で発展し、アメリカ的農業機構の何の特徴も、何の要素も存在しない、これはプロシヤ的農業機構の顕著な特徴をもつ資本主義発展の純粋にプロシヤ的な道である」とのべている、として、それに対して、「1907—1914年のロシア農業におけるアメリカ的農業機構の要素のこのように絶対的な否定には根拠がない」<sup>21)</sup>とのべ、この点を検討する。

まず、土地所有については、ストルイピン農業改革の時に、地主が900万デシャチナを失わない、農民はさまざまな手段で900万デシャチナ以上を獲得したことをあげ、「地主地は資本主義的、農村のクラーク上層部の手にわたった。それは、ロシア南部——ノボロシア地区、北カフカース、ボルガ河沿岸地方において特に強化された」<sup>22)</sup>という。

第二は土地利用についてである。農民的土地利用の圧倒的多数は改革後でも不合理で小地片を利用するものであったが、「しかし、南部地域やヴォルガ河沿岸においては、現代的な巨大な資本主義的経営が、地主地や分与地においてでなく、農民銀行から得た私有地において設立された。ここでは、土地はすでに地主の所有でなく、新しい段階——農業ブルジョアジーの私有である」<sup>22)</sup>という。

第三は経営制度についてである。農民経営の圧倒的多数は農奴制遺制の抑圧のもとにあるのであるが、「しかし、南部地域には、完全に現代的な農業技術を装備し、賃労働を広範に採用し、《上等な穀物》や家畜を国内市場のみならず国際市場に供出し、国際的分業や商品交換に参加する、アメリカ型農業機構の特徴をもつ、言葉の完全な意味での現代的ブルジョア経営が多くあった」<sup>22)</sup>

21) Там же, стр. 290.

22) Там же, стр. 291.

という。

シャプカリンは、この三点を新しい農業機構、アメリカ型の農業機構の要因である、と主張している。ここでは、アメリカ的道とアメリカ的農業機構とが区別され、これにもとづいて「二つの道」が考えられている。

この考えを支持する論者は Ф. Е. ローシ、事実上、支持している論者は А. Л. シドロフである。

Ф. Е. ローシは、レーニンの「それぞれの進化の基本的な特徴は、すべての地域で明白にみられる……したがって、農業進化の二つの流れは、どこにでも存在している」という言葉を引用して、А. В. シャプカリンを支持する。「《純粋な》プロシヤ型の道もアメリカ型の道も存在しない。その上、ある地域（たとえば、ロシア南部）では、アメリカ型の進化の特徴が優勢でさえある」<sup>23)</sup>という。

А. Л. シドロフは、ヨーロッパ・ロシアとシベリア、極東などの間には、あるいはヨーロッパ・ロシア内部にさえ、かなりの地理的、社会的条件のちがひがあること、レーニンの分析資料はヨーロッパ・ロシアに限定されていること、をのべた後、レーニンの考えについて次のようにいう。

「В. И. レーニンは……プロシヤやアメリカ合衆国のみでなく、ロシア農業機構の現実の関係もまた考慮した……レーニンの考えは……農奴制の遺物がより弱い地域では、彼が資本主義発展のアメリカ的道とよんだ進化の型が、より明白に表われるということである。ロシア中央においては雇役制が優勢であり、辺境地では資本主義が優勢であった。それゆえに、レーニンはロシア中央における農業問題の革命的解決の意義を、とくに強調したのであった。……

ここから、二つの結論がまったく明白になる。第一は、資本主義発展の支配的な型はプロシヤ的である。第二は、アメリカ型の進化の流れはロシアの現実の経済関係にあらわれたということである」<sup>24)</sup>。

23) Там же, стр. 300.

24) Там же, стр. 344-345.



「……改革の諸前提を考察して、レーニンはすでにこれら二つの傾向の闘争をみている。彼は、政治的闘争においてのみならず、農民経済に基礎をおく経済的可能性においてもまた、これをみている」<sup>25)</sup>。

「私は、極東における農民経済も、もちろん、それがニコライ二世の《幇了》のもとで発展した、ということを考えても、農業企業家タイプの経営と考える<sup>26)</sup>」。

これらの考えに対して、M. C. ペルソフは次のような批判をおこなう。ペルソフはドブロフスキーの意見の支持者である。

A. B. シャブカリンの意見やその変形された意見は誤っている。「あたかも、国の発展は同時に二つの異なった道ですすむ、すなわち、それは何か自動的に進行し、階級闘争や、どのような階級が社会の先頭に立つか、によらないで進むかのように主張している。しかし、このような方法に対して、B. И. レーニンは倦まぬ闘争をおこなった。彼が、国はこれこれの道を進むと書いたとき、それは常に次のことを意味した：一定の階級あるいは諸階級は、それに対抗する一定の諸階級の抵抗にうちかち、その道にそって国を発展させる、ということ。

ここには、客観主義とマルクス主義の方法論的な大きな違いがある」<sup>27)</sup>。

「レーニンは論文『二つの道』において次のように問題を提起する、《ロシアの道、その発展の性格と速度はなにによって規定されるか？》そして答える、《社会的諸勢力の相互関係、階級闘争の合成力によってである》。

このような観点から、ロシア農業における資本主義発展がどのような道を進んだかという問題を考察しなければならない」<sup>28)</sup>。

「1861年の改革から1917年の革命まで、ロシアにおける資本主義の発展の道は、地主的な土地所有の革命的廃棄を志向する労働者や農民を敗北させること

25) Там же, стр. 345.

26) Там же, стр. 346.

27) Там же, стр. 301.

28) Там же, стр. 302.

に成功した地主の手に、権力と所得がにぎられた、という決定的事実により決められたのである」。

「それではなぜ、レーニンは、資本主義発展の二つの道の闘争が進んでおり、それはいまだ終了していない、とくり返し強調するのだろうか。それは、レーニンはこの（諸階級の勢力）関係を不変のものと考えておらず、人民に対するツァーリズムの勝利も決定的なものでないと考えていたからである」<sup>29)</sup>。

「資本主義発展の二つの道の闘争は、ロシア農村の経済において深い根をもっている……プロシヤ的發展の道、アメリカ的發展の道にとっての前提が形成され、端緒……がつくられた。……しかし、これらの各々の發展の可能性はまったく違っている。

階級諸力の関係の結果、農業進化の地主的發展は、ロシアのすべての社会・政治機構とその歴史的運動の方向を決定した。反対に、農業進化の農民的、《経営者の》型の萌芽、端緒、要素は国における地主支配のもとにあった。それらは民主主義革命の結果としてのみ發展でき、すべての社会・政治制度の基礎となりうる。レーニンはいう、『ロシアの資本主義的發展の二つの道のうち、どちらが最後的にそのブルジョア制度を規定するか——歴史はまだこの問題を解決していない。すなわち、この解決を左右する客観的な力はまだつきはてていない。この解決がどのようなものになるか……1861年いらいははっきりと現われているこの二つの傾向の合成力がどのようなものになるかを前もって予想することはできない。ポリシェビキの課題は——マイナスの形（解党主義のように……）でなく、プラスの形で』、国の發展の根本的な利益を擁護する形で、この問題の解決に自分たちの活動をもちこむことである、と。

このようにして、レーニンが資本主義的發展の二つの道の闘争を認めたということは、そのもとで国の階級関係がまさに資本主義發展のプロシヤ的道にそって進んだということを決して否定しないのである」<sup>30)</sup>。

29) Там же, стр. 303.

30) Там же, стр. 304.

以上が、「二つの道」についてのペルソフの主張である。

次に、ペルソフはロシア辺境地におけるこの問題について、シャプカリン、ローシの考え方を批判して、「国の発展の道についての問題はレーニンにとっては、この発展の先頭にどのような階級が立っているかという問題と不可分であった。これは、もちろん、国全体——中央のみでなく辺境地も——に関連する。したがって、中央においては発展はある道ですすみ、辺境地では——他の道で、というかのような主張は正しくない」<sup>31)</sup>という。

「辺境地にアメリカ型の農業進化の一定の要素が存在するということは、その発展に独特な性格を与えているが、しかし、国の階級諸力の関係からでくるその基本的な線を変えることはできなかった。これは、レーニンがロシア帝国の制度の中における辺境地を考察する……段階でとくに明瞭となる」<sup>32)</sup>といひ、ツァーリ政府の植民地政策と辺境地の資本主義発展との関係についてのレーニンの考えを示したのち、「このようにして、農業進化の型は、その地域における地主的大土地所有の存在、あるいは欠如によって決定されるものでなく、すべての社会—政治制度により決定されるのである」<sup>32)</sup>という。

以上の諸説を検討しよう。

C. M. ドブロフスキーは、プロシヤ型の道の特徴を、農奴制残滓の存続、ツァーリ専制の形をとった地主・農奴主の独裁とみ、アメリカ型の道は、これらの封建的諸関係を根本的に廃棄する農民によるブルジョア民主主義革命の後でなければ一切存在しない、とみている。シャプカリンやローシを批判したペルソフも同じ意見である。

ロシアにおいて支配的であるプロシヤ型の道を、アメリカ型の発展形態にかえるには巨大な農民闘争がなければ不可能であること、闘争の核心である農民による農奴制的巨大土地所有の廃棄を中心にした、ブルジョア民主主義革命により地主権力＝ツァーリ専制を打倒しなければ資本主義のアメリカ型の発展は

31) Там же, стр. 305.

32) Там же, стр. 306.

支配的なものとはなりえないこと、農民経営の資本主義的發展により自動的にアメリカ型の道が優勢となり、支配的になるということとはありえないということ、つまり「二つの道」の問題は、一国の全機構的なものであること、これらの主張は、われわれが前稿(レーニンの「辺境地」論)第二節で検討したレーニンの理論を正しく理解した主張である、ということができる。この意味で、ロシア資本主義全体としての発展の型がプロシヤ型であるという、ドブロフスキー、ペルソフは基本的に正しい。したがって、レーニンの「二つの道」段階における植民地＝辺境地論を前提としないで、辺境地においてアメリカ型の道が發展したと主張する諸見解は、前提としてのレーニンの理論の理解において、誤っているといわざるをえない。

このような地主の利害と農民の利害の闘争は経済的な客観的基礎をもっている。エンカー的道は、地主経済と農民経済の共存、組合わせ＝雇役関係の状態において進化し、一部の大農を分出しつつ地主経済が先頭にたって資本主義的改造をおこなっていく道である。

「地主経営は存在しないか、あるいは、封建的領地を没収し細分する革命によって粉碎」<sup>33)</sup>されて、支配的となるのが農民的道である。この場合、アメリカ型の道において發展するときには、農奴制的巨大土地所有を基礎とする地主経済の存在やその資本主義的改造はありえないことである。

しかし、資本主義がプロシヤ型の道において發展する場合、「進化の基本的内容」をなす地主経済の資本主義的發展、賃労働による雇役制の漸次的置き換えに不可避免的に随伴して農民経済の資本主義的發展も抑圧され、緩慢な形であれ、進行せざるをえない。このような農民経済の資本主義的發展は、階級としての農民を一部は農業ブルジョアジーに、大部分はプロレタリアートにと分解させていき、それが今度は地主経済内部における雇役制の縮少をもたらす、という関係にある。

この農民経済の資本主義的發展は「アメリカ型の道」のために闘う農民のエ

33) 邦訳レーニン全集、第13巻、235ページ。

エネルギーの基礎である。

また、辺境地における「二つの道」の発展のあり方を研究する場合、農民経済の資本主義的発展の独特さが重要な問題となるのは明白である。この点についてのドブロフスキー、ペルソフの理解は全く不十分であり、「二つの道」の闘争の客観的基礎を全面的に理解しているとはいえない。シャプカリンが、アメリカ型の道とアメリカ的農業機構(срoй)を区別し、プロシヤ型の道による資本主義的発展のもとでもアメリカ的農業機構は存在、発展したという場合、事実上、われわれと同じことをのべているのであり、この点に関してはシャプカリンの主張は正しい。

シドロフはこの点について、プロシヤ型の道が支配的であったが、アメリカ型の進化の流れはロシアの現実の経済関係に表われている、とのべている。しかし、内容的に不明確であり、われわれの主張からすれば、不十分な考え方といわざるをえない。

## ま と め

以上、われわれはファデエフ論文を中心とする議論と、「帝国主義期のロシアにおける農業機構の特殊性」における諸見解とをみてきた。検討の成果は次のようにまとめることができるだろう。

1) ファデエフの提起した辺境地＝植民地の型の区別は、ロシアの辺境地の実態を解明する点において一定の前進をもたらすものであるが、このような分析の前提としては、ロシア資本主義におけるプロシヤ型の発展の過程、その経済政策、に関する理論的整理が必要である。この場合、レーニンの「二つの道」についての、正しい全体的理解が基礎となる。

2) レーニンの「二つの道」について。この問題はある国全体としての全構造的な問題であり、地域によってはちがった型において発展すると考えたり、また問題を農業経営のあり方に限定して考えようとするのは正しくない。したがって、辺境地における資本主義発展の道についても、ロシア資本主義全体と

しての全機構的性格の中において考えなければならない。

3) さらに、辺境地における独特な資本主義発展の実態の解明にとっては、アメリカ型の道をのぞむ農民の闘いの経済的基礎である、農民経済の発展のあり方を無視してはならない。

このような基本的考え方に依拠することにより、辺境地におけるブルジョア革命の不可避性、ブルジョア革命から社会主義革命への転化の必然性が解明されるようになり、社会主義革命におけるロシア辺境地の独特な役割、位置、もまた明瞭になる、と考えられる。